

FD ニュースレター

Health Sciences University of Hokkaido



北海道医療大学FD委員会

FD News Letter No. 8

- ☆ - ☆ - ☆ - ☆ - ☆ - ☆ - **大学教育開発センター特集** - ☆ - ☆ - ☆ - ☆ - ☆ - ☆

北海道医療大学では、平成19年度に大学教育開発センターを開設しました。センターは、大学教育プログラム開発部と全学教育実施部にわかれ、本学の教育力向上を推進していくことになります。

センター長に阿部和厚、専任教員として国永史朗、花渕馨也、兼任教員として二瓶裕之、森本敦司、山口明彦、日景盛、遠藤紀美恵、大友芳恵、富家直明、小松雅彦、長田真美の9名が配置され、これに学務部教務課の事務職員も加わって、まず、平成21年度からの全学教育の実施にむけて、全学教育カリキュラムをつくるのが最初の仕事となりました。

全学教育カリキュラムの提起には、平成19年11月から平成20年4月まで11回の打ち合わせがなされ、「導入教育」、「教養教育」、「基礎教育」、「医療基盤教育」からなる全学教育の形ができました。その後、関係の規程改正、看護福祉学部と心理科学部のカリキュラム改訂が承認されました。追って、薬学部・歯学部のカリキュラムが改訂されることになります。

全学教育の実施は、全学教育実施委員会（委員長 倉橋昌司）で検討され、秋には、平成21年度の全学教育で提供される授業も決定し、各学部で利用する形がハッキリすることになります。

一方、大学教育プログラム開発部は、本学の教育力向上へ向けて起動することになります。まず、「英語教育研究会」、「e-learning 研究会」、「全学教育研究会」が立ち上がりました。世界や全国的視野に立ちながら、本学の特色ある教育をつくりあげていくことになります。

今回のFDニュースは、大学教育開発センターの活動について紹介します。



全学教育科目と授業題目

大学教育開発センター長 阿部 和厚

□ 毎年、新しい授業が可能

これまでと比べて、平成21年度から開始される全学教育体制で最も大きな改善点は、ひとつの科目名のもとに、複数の多様な授業を提供できるようにしたことです。

これまでのカリキュラムでは、履修対象となる授業はすべて規程（学則）の中に表現され、新しい授業を実施するとなると、規程（学則）の改正が必要でした。そのため、新しい授業の実施はそう容易ではありませんでした。

これまでのFD合宿において、平成14年以来、多くの授業が設計され、提案されてきました。また、地域連携をキーワードとして採択された本学の特色GPでも、地域を巻き込んだ様々な授業が構想されまし

た。しかし、これらのほとんどは実現していません。今日、改善の方策は、直ちに具体化していく仕組みが必要です。

何らかの改善は、計画を実施し、毎年、見直し、手直しをしながら、前進、発展していきます。カリキュラム改善においても、新しい授業を毎年でも試行し、それを改善しながら、良い形にしていくことが必要です。今回の全学教育体制は、毎年新しい授業を提供できるようにしたことが特色です。

□ 主題別科目と教養教育のコア

ひとつの科目名で、様々な授業を展開する形は、大学設置基準の大綱化を契機として、教養教育と専門教育を有機的に連携するために、教養部が廃止された15年ほど前に大阪大学の教養教育で「主題別科目」として開始されました。北海道大学でもこれを取り入れ、教養教育のコア・カリキュラムという形で整理しました。現在では、日本の総合大学のほとんどが、主題別で教養教育の授業を提供しています。

とくに大きな基幹総合大学では、教養教育をふくむ全学共通教育は、2000をこえる授業が提供されています。これらのすべてを規程に盛り込むことはできません。そのため、授業をテーマ別に分類し、そのテーマ（主題科目）のもとに、様々な授業が展開されるようにしました。

この場合、テーマの分類の根拠が問題となります。ヨーロッパでは、ギリシャから中世にかけて、教養は、言葉に関わる3学「論理学・法学・修辞学」および自然に関わる4科「天文学・算術・幾何学・音楽」からなるリベラルアーツでした。アメリカやヨーロッパの大学はリベラルアーツの場として形成され、米国の4年制大学学士課程は、教養教育中心です。各コアから授業を取り、バランスのとれた教養を身につけることを主体としたカリキュラムからなります。それに大学院の専攻と関係した科目をプラスして履修し、専門教育は大学院でとなります。

米国のハーバード大学は、読み、書き、算術（数をあつかうこと）の基本教育に加えて、1）文学と芸術、2）科学、3）歴史、4）社会、5）外国文化、6）道徳をコアとした教育を展開し、学生はこれらのコアをバランスよく身につけて教養人として卒業します。これが、今日の大学教育におけるコア・カリキュラムのモデルであり、専門教育のカリキュラムも、この考え方をいれて整理されるようになりました。

日本の大学は、ドイツの実学を中心とした大学をモデルとして発展してきましたが、戦後、米国の教養教育も導入され、ほとんどの大学は、本学のように「幅広く深い教養と豊かな人間性の涵養」と表現されるような人間形成を教育目標の柱に入れていきます。

□ 全学教育における教養教育

教養教育のコアをどのようにするかは、各大学の実状、個性で異なります。本学では教養教育の科目を、1）人間と思想、2）人間と文化、3）人間と社会、4）自然と科学の4科目とし、それぞれから一つ以上の授業を履修することを勧めています。

人間形成が重要な医療系大学では、教養教育はとくに重視されます。教養は、1）最高レベルの専門職に必須のものであり、2）年齢が進むにしたがって、視野が広がり、3）経験が増すごとに意義が大きくなり、4）人間性を全体的に開発し、5）人生の目的を明確にし、感情の反応をみがき、6）物事の本質を現代の最高の知識に照らして理解できる力を養い、7）歴史観・世界観をつくり、8）批判的理解力（critical thinking）を身につけ、人間としてのコアを形成することになります。こうして学生は、専門職業人となることの自覚を形成し、また、生涯の人的発展を支えることになるでしょう。

□ 授業題目

教養教育科目の内容は、別に定義されています。これによって提供する授業がどの科目に相当するかが明らかになります。各授業は、「哲学」「芸術」「経済」「宗教学」「日本文学」「生物」などという学問分野名ではなく、内容を具体的に表す題目が求められます。たとえば、「ギリシャ哲学」「カントの哲学」「北海道の美術」「フランス印象派の絵画」「アイヌ民族の音楽」「石油をめぐる世界経済」「禅の教え」「大正の日本文学」「生物としての人間」「当別の文化」などのような題目です。

全学教育では、各科目に魅力的な多様な授業が提供されることを期待します。とくに、「医療基盤教育」は、本学に固有の形で医療系職業人養成に共通の教育を展開する必要があります。医療コミュニケー

ション」「チーム医療」「医療リスクマネジメント」「医療倫理」「人類遺伝」「薬」など、多くの課題が考えられます。

授業の提供は、平成 21 年度は、まず、各学部の現在の授業が履修できる形からはじめることとなります。しかし、学部の壁をこえて全学に共通する科目として、全学部の学生が混在しながら受講できるようにしたい。また、とくに「医療基盤教育」では、各学部の教員が共同してチームで授業を提供する形がイメージできます。

全学教育は、全学に共通の教育を提供するのみならず、全学の教員が責任をもつという体制です。また、教育は与えるものだけでなく、学生中心ですすめる授業も求められます。学生参加型授業は知識よりは、授業設計力が重要です。専門的内容でも、授業の組み立て方で教養教育になりえます。また、テーマ中心となれば、様々な題材で授業を展開できる教員も居るでしょう。教員チームによる担当もありです。

全学教育が魅力的な多様な授業により、本学の教育が生き生きと展開されることを願います。



全学教育は、どのように実施されていくか

全学教育実施部長・看護福祉学部 教授 倉橋 昌司

大学教育開発センターの「全学教育実施部」は、「大学教育プログラム開発部」で企画、提案され、「大学教育開発センター運営審議会」で審議、承認された全学教育プログラムを具体的な授業科目、授業題目として全学的に実施する役割を担っています。

昨年 8 月以来、大学教育開発センター職員を中心に、大学教育プログラム開発部において検討されてきました「全学教育科目プログラム」(案)が、12月に大学教育開発センター運営審議会で審議、承認され、その具体化は全学教育実施部における検討に委ねられました。ここでは実施にかかわる規程、各学部の全学教育の履修、授業の提供と多様な準備が行われてきました。

現在各学部で行われています学部教育科目は、学部により異なり、基本的には基礎教育科目と専門教育科目から構成されています。今回の「全学教育科目」の設置により、本学の教育課程は、全学教育と専門教育からなり、各学部授業科目は、全学教育科目と専門教育科目からなることになりました(改正学則第 28 条)。また全学教育科目においては、「授業科目」が複数の「授業題目」からなり、実際の授業は「授業題目」として実施されます(全学教育科目規程第 3 条 2 項)。

従って、全学教育実施部(委員会)の次の仕事は、各学部委員と各学部教務委員会との連携により、現行の学部教育科目を「全学教育科目」と「専門科目」に分け、さらに、基礎教育科目として実施されている「授業科目」を全学教育科目の授業科目に振り分け、さらに具体的な「授業題目」名を付けることです。全学教育は、全学の教員が責任をもつ全学共通の科目ですが、現行の基礎教育科目の多くは、学部人間基礎科学講座(系)の教員の方々が担当されていることから、これらの教員の方々に全学教育実施部内に設置される「科目担当者会議」のメンバーとして参加していただき、先にあげた授業題目名の決定作業(6月末まで)を担当していただいています。

全学教育実施委員会は、科目担当者会議において検討された「全学教育科目」授業題目の全学的な整合性を図り、学部教務委員会と連携し、学部毎の「全学教育科目」および「専門教育科目」を提示することとしています。これにより、各学部の授業科目(授業題目)担当者、時間割の決定作業が可能になります。現在、各学部のシラバス(授業計画)はそれぞれ独自の形がとられていますが、全学教育科目の設置を機会に、できるだけ全学的に統一した形でのシラバスにしていくことも予定しています。

大学教育開発センターでは、全学教育研究会をはじめ多くの研究会が立ちあげられ、活動を開始しようとしています。今後センター内で検討され、プログラム開発部(委員会)から提案されてくる具体的な授業についても、全学教育実施部(委員会)が学部教務委員会と連携をとりつつ、実施することとなります。



英語教育研究会

歯学部 教授 塚越 博史

私は、本学で教壇に立たせていただき 13 年半が経ちました。いろいろなものが様々な角度から見えてきたのと同時に、自分自身の“医療メガネ”の色が濃くなったのも事実でしょう。特に新任の同僚と話しますと、その辺りについて気づかされるのが少なからずあります。異文化コミュニケーションは、自分発見の旅と言われます。少し乱暴に言いますと、他者との交流が数多く実現した時に周囲と自分の異なる面が認識されると、いずれかが多数派だと気づかされ、その違いをどう調和させるか、あるいはさせないかを考える機会が与えられます。

さて、ここでは、“異文化”を持つそれぞれの英語担当教員から出されました、全学カリキュラム、カリキュラム構造、クラス人数、クラス編成、クラス運営等に関する諸問題と方策を列挙します。

これらは、本学の専任英語教員全員と大学教育開発センターの国永史朗教授からなる英語研究会において今後の研究活動における中心的検討事項となるものです。

全学カリキュラム	<ul style="list-style-type: none"> 各学部で名称の異なる科目を設定しているが、基礎力養成科目（1、2 学年）は基本的に全学類似（共通）の科目とし、学年進級に従い学部・学科特化科目を配置する。 現在、学部主導で行われているカリキュラム編成を全学的に見直し、共通到達目標を設定することによって英語力の向上を図る。
カリキュラム構造	<ul style="list-style-type: none"> 現在の各科目の独立性を保ちながら、さらに一貫した流れに沿って授業を展開できるよう、科目を有機的に連結させる。 学生の学力・ニーズの多様化に対応可能な範囲で柔軟なカリキュラム構成を目指す。
クラス人数・編成	<ul style="list-style-type: none"> 学部間で極度に異なるクラスサイズの解消を目指す。 英語力の学生間格差や幅広いニーズに対応するため、プレイスメント・テスト実施による能力別クラス編成（または“やる気”別編成）や同時開講のコンテンツ別クラス編成を検討する。
ク ラ ス 運 営	<ul style="list-style-type: none"> 講義方法や評価方法、細かい課題の設定を検討して、教育効果向上を狙う。 「わかる」、「力がつく」を実感させる運営を目指す。 非常勤講師も含めて、教師間、教師・学生間のラポールを大切にする。
選 択 科 目	<ul style="list-style-type: none"> 英語を「学ぶ」ではなく「使う」ことをテーマにした科目、レベルの異なる授業、言語科学関連科目の開講を検討する。 CALL 特化の授業を検討する。 学部専門分野に特化しないトピックのリーディング・ライティング・コミュニケーション科目を学部の枠を取り除いた形で開講することの可能性を探る。 選択科目検討の際は、時間割の枠や教員配置、履修者人数の偏りの可能性を考慮する。
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> CALL 教室での自学自習スタイルを、自習ソフト等の導入により、さらに効率的に展開させる。 各学年終了時に学生各自が自分の学力をトレースできるよう、統一学力試験の実施を検討する。 上級レベルの講義を大学院生共通として実施することの可能性を探る。



e-Learning 研究会

薬学部 准教授 二瓶 裕之

□ はじめに

e-Learning 研究会は、大学教育開発センター兼担の冨家直明准教授・小松雅彦准教授、心理学部の榎原健一准教授、情報推進課から塩崎弘樹課長と菅原徹課員、そして、私の6名を中心的なメンバーとして、本年度より活動を開始いたします。本報告では、e-Learning 研究会が取り組む問題と課題、研究計画、そして、研究目標などについてご説明いたします。

□ 問題と課題

北海道医療大学では、以前より情報ネットワークの基盤整備が重点的におこなわれております。一方で、情報ネットワークを活用した教育・研究開発の試みも行われていますが、この分野では、これから解決しなければならないテーマも幾つかあると思われます。たとえば、e-Learning の活用においては、現状では特定の講座や先生がコンテンツを公開していることが多いのですが、講座や学部を超えた全学的な利用については課題として残されています。また、現状では、学生全員へ均一のコンテンツを提示することが多くなっていますが、学生一人ひとりの学力やニーズに合わせたコンテンツを提示するような仕組みの開発も課題として残されています。

□ 活動計画

そこで、e-Learning 研究会では、これらの課題を解消すべく幾つかのテーマに沿った研究を行い、e-Learning のより一層の活用を目指しています。研究計画としては、まず、教務システムなども含めて学内で利用されている e-Learning システムの利用状況を把握するとともに、医療系大学などを中心に国内外における e-Learning の先端的活用事例も調査したいと考えております。また、e-Learning により教育効果を評価する仕組みも調査し、最終的に、本学の学生ニーズに沿った e-Learning の開発に寄与したいと考えております。

□ 研究目標

研究目標のキーワードとしては、全学的、ユビキタス、そして、ポータル3つを考えております。まず、全学的な立場から学部を超えた e-Learning システムの活用を促進します。これにより、普段の授業での利用に加えて、入学前教育、国家試験対策、そして、卒業教育などを広くサポートすることができればと考えております。次に、学生一人ひとりのニーズに適したユビキタスなコンテンツを提示する仕組みを構築します。これにより、自然と苦手分野を集中的に学習できるようなシステムや、学習意欲の変化をも捉えられるシステムなどを構築できればと考えております。更に、大学生活を支援するための全学的な総合ポータルサイトを構築し、学生・教職員のかたに進んで使っていただける e-Learning システムを創りあげたいと考えております。

e-learning システムの構築は、本学の学生がトータル的に学力向上したという効果を保障する必要があります。学力向上には、考える力、課題解決力、応用力、自立的学習力に結びつく e-learning システムが必要であり、また、e-learning を学生・教員のだれもが有効に活用する学習法、教授法の研究と開発も同時に進めることとなります。



全学教育研究会

大学教育開発センター 教授 国永 史朗

全学教育の大きな枠組みが構築されました。主に人間教育を担うこの器に、これから何を注いでいくかが重要であります。いま、学生に必要なのは、「学習の習慣」と「考える習慣」を身に付けることであり、また「自己の学ぶ学問の位置」を知ることであります。これらの認識を基本として、全学教育研究会では導入教育、教養教育、医療基盤教育の器に注ぐべき授業内容を検討していきたいと考えております。なお、本研究会は阿部和厚大学教育開発センター長を中心にして、同センター専任の花淵馨也准教授と私、そして適宜他の教員も参加していただいで進める形になっております。ここでは、それぞれの教育において何を検討して、具体をどのようにしていきたいのかについて述べさせていただきます。

□ 導入教育

大学の教育とは、考える力を養成する場であり、既存の知を分析、批判し、新しい知の創造活動が行なわれる場であります。導入教育の目的は、知の創造のプロセスに参加するために必要な基本的な学習技術を習得することにあります。従って、「読む」・「書く」・「議論する」などの教育をどのような内容で、どのようなやり方で実施していくかが研究会での主要な課題となります。一つの教育方法として、複数の教員の参加をお願いして、各教員の学問分野との関わりの中で学習技術を学ぶというやり方が考えられます。これは小集団教育となり、かつ双方向的な授業が可能となり効果が期待できます。いずれにしましても実施に向けては、教員間で最低限に共有しなければならない授業内容の検討や学習到達度の評価法（学習ポートフォリオも考えられる）などの開発が必要であると考えております。

□ 教養教育

従来の教養の理念は、言葉・文字・記号だけからなるものであったといえます。教養教育において大切なことは、新しい知見に触れ、それを分析し思考し、それらから生まれてくる行動であります。自分の考え方や行動がわずかでも変わることが必要であります。教養教育の大きな目標はそこにあり、広い視野で判断に富む創造的主体の育成であると考えます。教養教育科目区分には、人間・文化・社会・自然科学の授業科目を配置し、広く学問の本質をバランスよく学ぶことができるようになっております。ここにそれぞれ授業の内容を具体的に示す授業題目を提供していきたいと考えております。この教育の意図からすると、各授業科目から少なくとも1つ以上を履修することが望ましいと考えております。ここでは知識の伝授ではなく、各授業題目に共通して、各学問の理解から一定の考え方や能力を身に付けることができるような内容を含ませたものにしたいと考えております。たとえば、様々な学問分野の知識の意味・意義を評価できる能力、未来に対し何が問題であるのかを考え出していく能力、実証性に関する能力、物事を推論していく能力などを育む授業内容が考えられます。このことに関しては研究会でさらに議論を重ねていきたいと考えております。

□ 医療基盤教育

医療に纏わる諸問題は、今日、社会的に、そして人間の価値観や認識体系にも大きな影響を与えております。それらはいかなるものであるのかをまず客観化することが大切であり、将来、医療系職業人となる学生に求められております。その上で、各医療系職の社会的使命感についての認識を深めることが大切であります。医療基盤教育の目標はそこにあると考えております。これまで実施してきた個体差健康科学は、社会と個のかかわり・ゲノムと人間・先端医療と倫理などをテーマとする内容へと発展させて、公開講座も視野に入れて、ここで展開することになっております。ここには、また医療倫理および地域連携の科目

が配置されており、新たな授業題目を提供していきたいと考えております。医療倫理の授業については、全学部教員の広いご理解のもとで実施し、全学部生が共に席を並べて受講できるような授業形態を研究し、本学の特徴を発信できるものにしていきたいと考えております。

ニュース

国家試験対策 e-Learning 携帯サイト

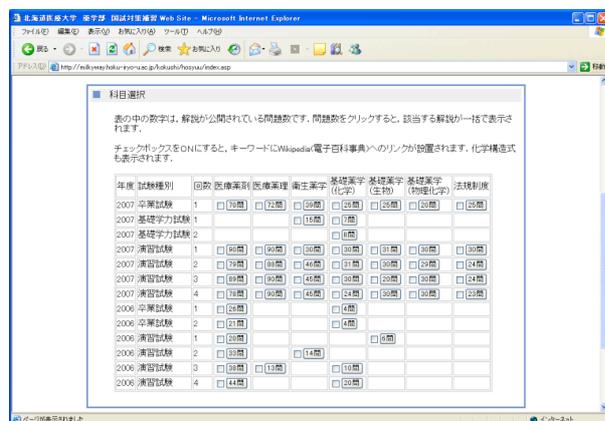
薬学部 准教授 二瓶 裕之

□ はじめに

現在、北海道医療大学では e-Learning システムの一環として国家試験対策を目的としたパソコン・携帯サイトを運用しています。特徴は、携帯電話からも利用できる点ですが、これにより、たとえば、通学時間や授業の合間などの時間を有効に活用した学習ができます。本報告では、薬学部と本学情報センターが共同して実施しています国家試験の補習サイトと、現在開発中の国家試験過去問サイトについて紹介いたします。

□ 薬学部国家試験補習サイト

国家試験補習サイトでは、薬学部で実施している基礎学力試験、演習試験、卒業試験の解答・解説を閲覧できるようにしています。現在、薬学部全教員の協力をいただきまして解答・解説の入力が行われています。入力された解答・解説の題数は 2107 題 (29 万文字) にもなり、重要なキーワード、関連した学習事項、参考図書など薬剤師国家試験に密接に関連した情報が蓄えられています。



上図はパソコンで解説を表示した補習サイトの画面になります。解説は試験問題ごとに表示したり、キーワード検索で表示することができます。また、教員用の画面では学生の学習履歴を表示でき、参照回数が多い問題の割り出しや、学生の学習意欲の変化なども確認できるようになっています。

□ 学生の参加と教育効果

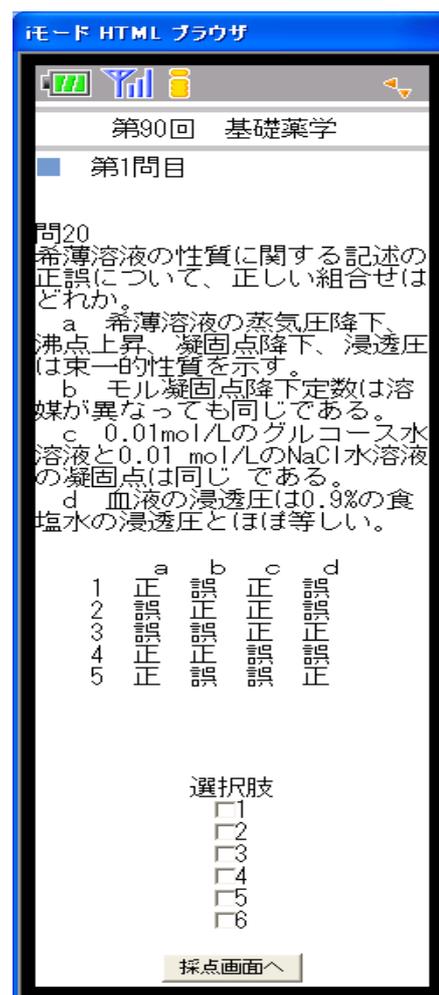
利用者は主に薬学部4年生です。補習サイトを公開してから約1年が経過しましたが今までに 96 万題分もの解説が参照されています。また、トップページの参照回数は 19 万回、うち携帯電話からのアクセスが 5 万 6 千回となっており、アクセスの 1/4 は携帯電話からとなっています。このように多くのアクセス数があることから、学習への動機付けや刺激としては一定の教育効果があると思われます。ただ、学習成績（特に、国家試験合格率）とアクセス数との関連は今のところ不明となっているのが現状です。補習サイトでは問題の解説のみが表示されることから、今後、国家試験関連の問題を解く機能を持つサイトなどの利用などからも、教育効果を定量的に計りたいと思います。

□ 国家試験過去問サイト

この他にも、現在、国家試験の過去問を携帯電話で解く Web サイトを開発しているところです。問題や正答などのデータも入力したうえで Web サイトを公開しますので、教員によるデータ入力作業も極力抑えられるようにいたします。また、学習履歴を視覚的に表示することで、学生一人ひとりの苦手分野を把握するなど、きめこまやかな学習指導ができるようにいたします。現在、薬剤師国家試験 720 題、社会福祉士国家試験 150 題を入力済み、今後、歯科医師国家試験の問題なども入力していきたいと考えております。近々、Web サイトを公開したいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

□ むすび

現在開発しています国家試験対策 e-Learning サイトは、すべて、携帯電話からも利用できるようにプログラミングされています。これにより、いつでも・どこでもニーズに合わせた学習ができるといった可能性が開けます。また、もうひとつの特徴は、Web サイトの立案、プログラム開発、そして、運用・管理に至る全てのプロセスを、委託業者ではなく、関連する各学部の先生と情報センターの教職員が行っている点であります。教育に携わる職員が e-Learning サイトの開発を直接行うことで、教育上のきめこまやかな設計なども可能になるかと思われまます。今後も、国家試験対策を目的とした e-Learning システムを構築していきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。



編集後記

FD ニュースレターNo. 8 をようやく発行することができました。予定より大幅に遅れ、大変申し訳ありません。今回は、大学教育開発センター特集を組んでみました。同センターが開設されて1年が経ちますが、未だ具体的な活動が見えてこないとの声を時々聞きます。本特集がそのような疑問に少しでも答えることができれば幸いです。(Y・T)

発行日 2008年7月25日

発行元 北海道医療大学FD委員会

編集委員 阿部和厚、○有末 眞、井出 訓、及川恒之、小澤次郎、国永史朗、齊藤浩司、関崎春雄、土肥聡明、○東城庸介、長田真美、○中澤 太、平藤雅彦、花淵馨也、横山登志子、飛岡範至 (○発行担当)